

● C O N T E N T S ●

● 巻頭言.....	1	● 研究紹介.....	6
● ニュース.....	2	● 事業日誌.....	8
● プロジェクト研究.....	5		

巻頭言 逆転の発想のすすめ

自然科学研究科長 辻 彰

「いつもきれいに利用していただきありがとうございます。」公衆トイレにこのような張り紙があると、汚さないように心がける自己規制が働く。「きれいに使いましょう」という表現よりは効果的である。「一生懸命やれよ」という励ましは、しばしば本人に対する叱咤と受け止められ逆効果に働くことがある。少々物足りない結果が得られた場合でも、「一生懸命やってるじゃないか」という誉め言葉で次への期待につなげれば、本人にやる気を誘起させる効果がある。頭で分かっている、なかなかこの誉め殺しができない。欠点が目につき、それを指摘して相手を刺激するか、落胆させる結果を招くのが落ちである。組織の活性化は、目だって向上が見られない構成員の尻をたたいても達成されないことは、多くの事例で経験している。

少子化の時代を迎え、すでに受験生と大学入学定員がほぼ同数となる時代が到来し、魅力のない学部・大学・大学院に学生・大学院生が集まらないことになり、定員割れが懸念される。はたして我が金沢大学は魅力と活力のある大学として生き残るのであろうか。

これまで大学においては、一度研究職に就くと、どのような研究をしようと、その研究の成果はどのようであれ、教育活動としての講義がいかようであっても、外部から批判を受けることなくその職に止まることができた。この自由が尊重された結果として、大学の研究・教育活力の低下と人事の停滞をもたらしてきたことを鑑みれば、大学人に対し適切な評価制度を導入して活性化を図ることはやむを得ないことと教員の多くは理解している。問題は評価のあり方であり、その評価にどのように対処するかである。尻をたたけば、逆効果になる。

教育活動の評価として外国の大学では、学生からあるいは同僚から優れた授業が評価された教員には「Education Award」が授与されている。大学内の掲示板あるいは自分の研究室に飾ってある賞状を訪問者に紹介して自らの偉業に誇る教員は、例外なく今後の授業をもっと魅力的にしようと意欲を燃やしていた。私の知る限り「Education Award」受賞者は優れた研究者でもあった。残念なことに、日本では優れた教育者に対し個別評価をして「Education Award」という形で称える行為を嫌う傾向にある。教育評価の難しい原因の一つもなっている。

“Publish or Perish” この標語は大学や研究機関で働く科学領域の研究者に対して、「論文を書きなさい。さもないと、相手にされなくなるぞ。」と警告したもので、少々過激な標語である。科学は研究成果の公表と、その正当な評価が行なわれて初めて健全な発展が期待される。研究者が成果を公表し他の研究者から評価を受ける道は学会で発表するか学術誌へ発表するかのいずれかになる。学会での発表は、限られた人に対する発表で公表とは程遠いものである。問題は、公表された論文の質に対する評価ができるかどうかにある。評価は第一に研究の独創性を見抜かねばならない。第二に研究で取り上げられた問題に対して一貫性を持って当たっているかどうかも見抜かねばならない。そして最後に問題解決に向けて如何に精進しているかも知らなければならない。そして正当な評価を得た研究には適切な財政的な支えがなければならない。また研究の終了時には研究が初期の目的に達しているか評価検討されるべきである。これらの一連の評価には高度の専門知識と相当の情熱とエネルギーをもって運用する覚悟がいる。したがって、多くの場合その研究者が属する学会にはその優れた業績に対して奨励賞、部門賞や学会賞として顕彰する制度がある。それらの受賞に値するかどうかを評価してもらうためには、一般に自らの申請あるいは関係者が推薦する形をとっているが、極めて限られた研究者にしか授与されていない。

このような申請による評価に対して、優れた研究を達成した、あるいは向上途上にある研究者を機関として称える制度を導入すれば、研究者個人の研究能力が益々促されるであろう。研究者個人の能力が高まれば、研究機関としての大学の活力は向上し、国際的にも存在感を高められるであろう。またすべての大学において適切な評価制度が運用されるようになると、大学間の人の動きが促進される。ある機関で何らかの理由から能力が十分発揮されていない人が、他機関に移ることで眠っていた才能が開花することもあることは、プロ野球の世界を見ても解る。

標準より劣る教員の尻をたたいて励ますよりも、「いつも良い講義をしていただきありがとうございます」、「良い研究で金沢大学の活性化に貢献いただきありがとうございます」を標語に、教員個々の自覚を促せば、大学の教育・研究に良い環境をもたらすこととなる。

ニュース

第5回生命工学トレーニングコース

3月1日(水)～3日(金)、学際科学実験センター遺伝子研究施設において、第5回生命工学トレーニングコース(遺伝子工学・高等技術コース)を開催した。今回は44,000遺伝子が搭載されたアジレント社のホールマウスゲノムアレイを用いて、実習を行った。RNAの調整法、蛍光色素を用いたラベル化、ハイブリ・洗浄、さらに本施設にて導入されているアジレント社のマイクロアレイスキャナーを用いて数値化し、エクセルを用いて簡単なデータマイニングまで行った。3日間の日程で、学内7名、学外3名の計10名の参加者で行い、マイクロアレイの解析手法についての原理、及びそれぞれのステップにおける注意点について、講義及び実習を交互に織り交ぜた形式で行った。



講義風景

第7回バイオサイエンスシンポジウム

学際科学実験センターゲノム機能解析分野が企画を行い、「バイオインフォマティクス(生物情報学)への招待」をテーマに、金沢大学自然科学研究科棟にて、3月14日

(火)に開催された。招待講演として、理化学研究所の豊田哲郎博士が、「DNAチップの高度な利用とバイオインフォマティクス-ENU誘発変異マウスにおけるハイスループットな変異部位の同定、タイリングアレイによるシロイヌナズナの遺伝子発現解析」という演題で講演された。また、東京大学の松崎素道博士が「単細胞紅藻*Cyanidioschyzon merolae*」のゲノム解読について講演された。続いて、学際科学実験センターの西山智明助手を含む3人の研究成果の報告があった。

学際科学実験センター公開講座 第27回北陸実験動物研究会

学際科学実験センター公開講座「トリ、ブタからヒトへ新型インフルエンザは拡大するのか」が、第27回北陸実験動物研究会との共催、金沢大学十全医学会の後援にて、医学部記念館を会場に4月1日土曜日に開催された。本公開講座は、最近話題となっている動物由来感染症の脅威、特にアジアから中東に広がりつつあり、世界的な大流行(パンデミック)の危険性がささやかれている高病原性トリインフルエンザウイルスをテーマとした。講師には、動物衛



公開講座の風景

